

過疎・高齢化農山村地域の集落復興に関する研究
 —長野県北部地震後の栄村青倉・小滝集落を対象として—

A study on the rural reconstruction from the northern Nagano earthquake(2011)
 under depopulation and aging problem

— A case study on Aokura and Kotaki community ,Sakae Village—

薩其日拉图¹, 市古 太郎²

Saqirilatul¹ and Taro ICHIKO²

¹ 首都大学東京都市環境研究科 都市システム科学域

Graduate School of Urban Environmental Sciences Department of Urban System Science, Tokyo Metropolitan University

² 首都大学東京都市環境研究科 都市システム科学域

Graduate School of Urban Environmental Sciences Department of Urban System Science, Tokyo Metropolitan University

1.はじめに

2011年3月12日未明に発生した長野県北部地震(M6.7)では、長野県下水内郡栄村に被害が集中した。(表1)。

表1 栄村の建物被災状況

区分		全壊	大規模半壊	半壊	一部損壊
栄村	住家	33棟	21棟	148棟	492棟
	世帯	33世帯	21世帯	151世帯	521世帯
	非住家	160棟	22棟	118棟	747棟

栄村における直接死者はゼロであった。一方で、避難生活によるストレスを原因とする災害関連死が3名、軽傷10名であった。震災前から進んでいた過疎高齢化、住まい再建、農業復旧・復興、集落の維持運営などに大きな影響を与えている。

本研究は、集落がどう復興していくか、栄村で最も被害を受けた青倉戸小滝の2集落を対象地域として考察する。

2.対象地域の概要

対象地域とした青倉集落は58世帯、人口 140 人、小滝集落は 15 世帯、人口 42 人である。

栄村の産業は米作りを中心とした農業で、加工トマト、山菜栽培が有名である。栄村の村土 93%は山林原野が占め、田畑が占める割合は 3.3% (2009)。しかし、15 歳以上就業者数の 35% (2010)が農業に就業しており(なお、第二次産業は 17%、第三次産業は 48%である)、農業は栄村の基幹産業となっている。栄村では1950年代から人口減少が始まり、2012年 10月1日まで村内 31 集落が点在し、世帯数 818、人口 2114 人、高齢化率 46%、半数の集落は、65歳以上が50%以上になっている

3.調査手法

本研究は、二つの集落の建物の解体新築状況、土地利用や農地などについて現地調査を行い、また集落の行事や共同作業、復旧・復興への課題などについてヒアリング調査を行った。

4.集落の空間調査の詳細分析

2012年4月から2013年の9月まで、青倉・小滝集落で四回の現地調査を実施した。

(1)青倉集落と小滝集落の建物被害状況

表2 小滝集落と青倉集落の被災状況

区分	全壊	大規模半壊	半壊	一部損壊	合計
小滝集落	3棟	0	7棟	7棟	17棟
青倉集落	10棟	0	7棟	15棟	32棟
住家	14棟	6棟	19棟	22棟	61棟
非住家	26棟	3	8棟	26棟	63棟

(2) 4回にわたる建物実態調査

集落の建物実態調査の纏めは以下のようなものである。

表3 青倉・小滝集落の建物変化

区分	青倉集落				小滝集落			
	12年4月	12年9月	13年4月	13年9月	12年4月	12年9月	13年4月	13年9月
解体された住家	24軒	24軒(+0)	24軒(+0)	24軒(+0)	6軒	6軒(+0)	6軒(+0)	6軒(+0)
新築された住家	6軒	10軒(+4)	12軒(+2)	12軒(+2)	1軒	2軒(+1)	2軒(+0)	2軒(+0)
解体された非住家	24軒	25軒(+1)	25軒(+0)	25軒(+0)	10軒	12軒(+2)	12軒(+0)	12軒(+0)
新築された非住家	10軒	11軒(+1)	15軒(+4)	16軒(+1)	4軒	4軒(+0)	6軒(+2)	6軒(+0)
解体された空家	4軒	5軒(+1)	5軒(+0)	5軒(+0)	0	0(+0)	0(+0)	0(+0)
村営住宅	0	5軒(+5)	5軒(+0)	5軒(+0)	0	1軒(+1)	1軒(+0)	1軒(+0)

(表の中上の数字は合計数、()の数字は前回のデータより増加数)
 (12年9月と13年4月の建物実態図は省略)

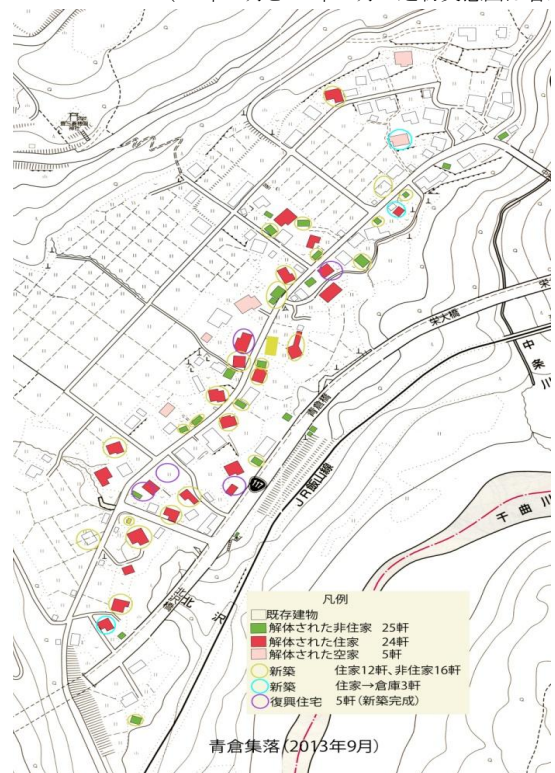


図1 青倉集落の建物実態(2013年9月)



図2 小滝集落の建物実態(2013年9月)

5.集落の農業

栄村の農業の第一問題は担い手の高齢化の問題である。これは、山村集落の限界集落化—集落消滅という全国的な問題とも相似性を持っている。その条件下において、栄村での農業復興は大きな意義を有する。農業就業人口の平均年齢は、全国 65.8 歳、長野県 66.9 歳に対して栄村 70.5 歳である。また、栄村では基幹的従事者 372 人(2010 年)うち65歳以上の高齢者は 77.4%と高い(栄村全体の高齢化率は 46.2%(2010 年)である)。震災前から農業経営体数は減少傾向にあり、2005 年

総農家数は 1975 年に比べて 36%減少している。高齢化に伴う耕作放棄地が拡大していた。耕地面積中で耕作放棄地が占める割合は、全国 10.9%、長野県 23.1%に対して、栄村 27.4%であり、高齢過疎化が進む中、耕作放棄地が増加していた。

農業と農家の被害は、農用地にとどまらず、水路・農道・ため池といった農業用施設にもわたっている。

栄村役場の被害状況の把握によると農地及び農業施設関係の総合被害額は 14 億 6 千万円余となっている。特に栄村の基幹産業である水稲作付の確保などの問題が山積しており、農地復旧を進めると同時に、高齢化の進行と農家の米作りに対する思いなど精神的な打撃が大きく、この問題解消が緊急の課題となっている。

2012 年、2013 年に青倉集落と小滝集落を対象に農地再建状況調査を実施した。ヒアリング調査により、農業復興課題や方向性について加えて分析を行った。農地耕作実態について、栄村の地図を用いて、現地で、耕作状況を調べ、図面化した(図 4~図 6)。また、聞き取り調査では、青倉集落で農地圃場整備の検討がなされているが、集落の中で、農業だけで生活するのが大変。高齢者の方にとって農業だけで十分生活出来るが、子育てする若者世帯にとっては厳しい;二集落では、農業以外に副産業を持つ世帯が多い;小滝集落では、堆肥撒きなどの農作業は現在共同で行うことになった等のことを分かった。



図3 2012年9月小滝集落の農地状況(発災からの1年半)



図4 2013年6月小滝集落の農地状況(発災からの2年)

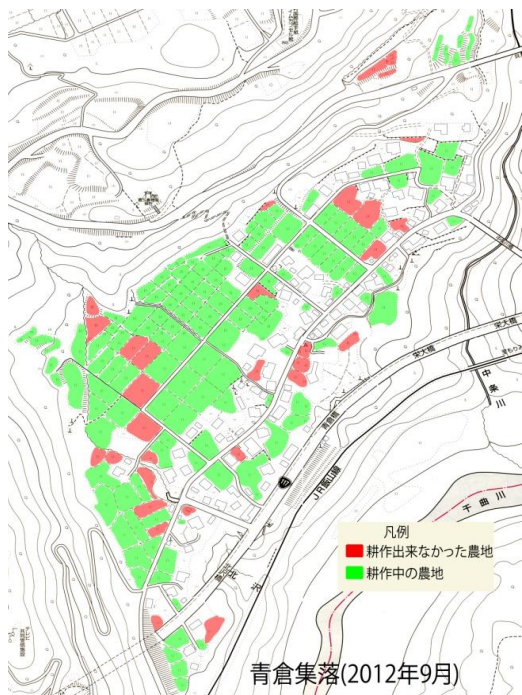


図5 2012年9月青倉集落の農地状況(発災からの1年半)

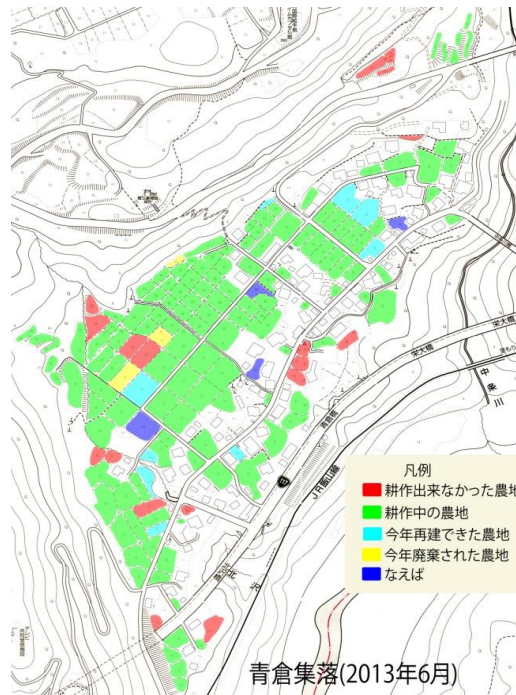


図6 2013年6月青倉集落の農地状況(発災からの2年)

震災があった2011年小滝集落と青倉集落では、農地の被害が多かったため、農地被害状況がまだ明らかになっておらず、農道の復旧、農作業の倉庫再建などがまだ出来なかったことにより、三分の一の農地しか耕作ができなかった(現地の方の話より)。2013年の調査によると、集落の農業再建状況はほぼ復旧しているが、震災により農地放棄されたところが見られる。

6. 集落単位での暮らし

集落の行事や共同暮らし方について現地調査や集落の方々にはアヒリング調査を行い、青倉集落と小滝集落の復興に向けた取り組みについて分析する。

(1) 集落行事

各集落で、集落行事が大切にされ、青倉と小滝でも集落単独で行われている行事が少なくない。表4は集落の年中行事である。

青倉集落では、震災前後の行事があまり変わらないが、夏祭りの規模が震災前より小さくなり、灯籠も重いので震災の年から灯籠を持って歩くなどの内容も変更されている。「先頭に立つ人があまりいない」、「年寄りの人数が多いから力が足りない」、「やりたい人よりやりたくないの方が多くなってきた」といった点が指摘されていた。小滝集落でも年間行事は変化している。五月の「田休み会」は「竹の子の汁会」になった。「古道歩き」は2009年から検討され、2010年から行われ、2011年まで年一回だったが、2012年から年二回行うことになった。外部の人々との交流が深まり、お米の販売促進にもつながっている。

表4 青倉・小滝集落年間行事

月	小滝集落	青倉集落
1月	・新年会	
2月	・道祖神祭り	雪上運動会・道祖神祭
3月		
4月	春普請	春普請
5月	田休み会・古道歩き	春祭り
6月		
7月		
8月	夏まつり	夏のお祭り
9月		敬老会
10月	・古道歩き	
11月	・秋の普請	暮れ日沫(まち)
12月	お祭り準備	

(2) 小滝集落行事の事例:「古道歩き」

震災後、戸数17戸の小滝集落は、住宅、農具舎、畜舎、農地等に大きな被害を生じた。地域の人達は、集落を持続するには、「まず水田の復旧だ」と2011年5月はじめ復興プロジェクトチームを立ちあげ、2013年11月まで27回の集落内の勉強会を行い、震災から二年半にわたり、「小滝集落復興計画」を作成した。小滝集落は震災後集落の資源を活かし、外部との交流を深めるため「古道歩き」を実施している。2012年11月4日と2013年の11月5日に実施された「古道歩き」を体験し、合わせて集落の方々にインタビュー調査を実施した。

インタビュー調査結果:

・2012年の古道歩き会が一回行われたが、2013年は春(5月)、秋(11月)二回行われた。

・2010年、2011年は栄村NPOが主催していたが、2012年から「小滝集落古道歩き会」の有志たちが自分たちで主催することになった。

・古道整備は、年に何回か行われ、参加するのは集落の住民であり、2013年は6月10～11日に実施された。小滝集落住民4人、外部の方3人(NPOのスタッフ二人と筆者)で二日間古道整備を行った。

・2012年の古道歩きは定員25名のところ、41名の方が参加し、村の人13人を合わせて参加者は全部54人であった。古道歩きについてネットによる情報発信が少ないため、情報発信を強化し、参加された方とのその後の交流が検討されている。

・2013年11月の古道歩きでは、古道歩き、昼食交流会、野沢菜収穫体験など内容が多様化していた。2013年の古道歩きで最も大きい変化は集落の方が多く参加した。震災前は有志たちの動きだけの取り組みであったが、震災後集落復興の一つシンボルになっていると思われる。

7. 考察と課題

青倉集落と小滝集落を対象とした震災後二年間の調査を踏まえ、次のようなことが明らかになった。

(1) 住まい再建が進むものの古民家風景などの集落資源が失われ、賑わいの生活空間が消滅

集落の空間的な変化から見ると、2013年9月まで、青倉集落では解体された住家24軒、解体された非住家25軒、新築された住家12軒(新築率50%)、新築された非住家16件(新築率64%)、26軒の建物が震災前より消滅し、小滝集落では、解体された住家6軒、非住家(倉庫・車庫など)12軒、新築された住家2軒(新築率33.3%)、非住家6軒(新築率50%)、10軒の建物が消滅した。一方で、2012年12月復興住宅が完成し、被災者の住まい再建、農地耕作再建が完了したと考えられる。

(2) 人口が減っていく一方、個人の農地面積が増加し、新たな農地圃場整備が検討されている

小滝集落では、離村した世帯の放棄農地を集落単位で、各世帯が分担し、2013年耕作をし、農地の維持させるため努力している。青倉また、集落では、青倉集落の農地は山地の棚型の田んぼが多く、機械化する検討を進め、集落周辺の田んぼが小さいため、大きくすることへ整備を計画している。2014年から農地基盤整備の合意を図り、圃場整備をしてもどれ位の人が農業が出来るのかは今後数10年の心配事である。それは、農地をやり続けれる後継者が少ないからである。今後集落の農業者が高齢者中心になることに対し、農地、農道、農作業の機械化を進行させ、共同化へ変化させることが期待される。

米作り、販売について、二つの集落でヒアリング調査を行い、米がお金になるまでのプロセスを把握した。従来は多くの農家が、米を農協に出し、農協が販売していた。現在は個人で直販売もなされている。青倉集落では、震災前から米直販売をしてきた。小滝集落では、震災後から米を直販売するようになり、消費者を増やすため小滝の米をブランドにしたいと集落の有志たちが自分たちで各農産物直販売イベントなどに参加し、東京などへもイベント出店している。

農協と直販売の買い取り差(農協:60Kg/21500円;直販売:60Kg/30000円)が大きいと、直販売を進めようとしているが、集落の中で、高齢者世帯は殆ど直販売が出来ず、農協に米を出している。同じ集落で暮らし、同じように米を作っているのに、同じような価格で販売出来ないのが現実であり、年金や農業だけで暮らす高齢世帯に対して、何らかの対応を取るべきであると考えられる。

(3) 集落を基本とした復興への取組と「集落力」の回復

栄村の復興は、復興計画としても、住民の意識としても集落を基本単位として明示しており、各集落の復興が栄村の復興に繋がることを名実ともに機能している。

ヒアリング調査を踏まえ、集落の自らの力を回復させ、集落の組織を維持するのは大切だが、復興により役に立つ組織のあり方を検討する必要性があろう。

青倉集落では選挙で役職を選んでいるが小滝集落では持ち回りで役職をえらんでいる。復興に向けた動きにおいて、青倉集落と小滝集落が大きな差がある。ヒアリング調査などから、小滝集落が復旧復興に向けて集落中で2013年11月まで27回

の勉強会を行ったことに対し、青倉集落はそのような動きがあまりない。集落の纏まりとしては小滝集落が非常に良く、一丸となって活動している。小滝集落では、2013年10月から、集落の空家や震災で被害を受けた古民家を修理し始め、外部の若い世帯を受け入れ、大きな古民家を将来古道歩き交流場所にするなどの検討をし、具体的に事業を行っている。それに対し、青倉集落では、震災で全壊になった古民家「あんぼの家」が修復され、交流の拠点とされていたが、活躍する方法について集落内の意見がまとまらず、外部の宿泊や交流になっていた「あんぼの家」が活躍出来ない状況になっている。また、青倉集落の現段階では、負担が少なく参加に楽しい集落行事があっても、若者の参加が少ない、若者がいても、世帯から人を出さない。こんな流れはずっと前から続けてきて、若者の存在感が薄いことがインタビュー調査で指摘された。

青倉・小滝集落の役職運営の形と震災後の復旧復興に向けた集落単位での動きからみると、過疎高齢集落の復興においては、若者が活躍してくれる舞台づくりと住民の意識を向上させ、集落「まとまりの良さ」を重視する組織対策や支援が必要である。

(4)外部との交流をてことした集落復興の展開

栄村では各集落の行事が其々行われているが、震災後、以前から行われていた行事や祭りが変化している。小滝集落では、震災後、集落と外部の交流を重視した内容の行事が行われている。例えば、春行われる田休みの「歩け歩け会」が「竹の子の汁会」に変わり、震災の時お世話になった外部の人々と一緒に行う行事になった。また、村外の集落ファンを増やすため、春と秋に古道歩き会などを行うことになった。小滝集落では、米を直販売で農協より高い値段だけではなく顔が見える関係作り、その後の広がりなどを期待している。

(5)集落維持に対する住民の意識が変化

復旧事業がほぼ完成した栄村では、人々の生活は通常に戻り、安定した感じがする。その中、家、道路、農地がすべて直ったからのんびりしている人もいれば、震災を契機に危機感を感じ、集落を復興させようとしている人もいる。

小滝集落を事例として考えると、震災後、集落の人々の考え方が変わったと思われる。震災が大きな変化を集落に与えたが、思想の変化も大切な変化の一步であると思う。思想の変化により、行動も変化している。震災を契機にこれまであまりにも考えなかった集落の維持問題について強く感じるようになったと小滝集落の方が多く話していた。世帯が減っても、高齢化問題が深刻しても、集落を維持させたいという気持ちになったからこそ、集落単位で色々な動きを出している。

震災を経て、集落をどう維持させようという点で危機感を持ち、過疎問題を以前より重視し、自分たちで動きを出している。

8.今後の課題

日本全国で少子高齢化が進んでいるが、その中、農山村地域の過疎問題が最も深刻されてきた。栄村の青倉集落と小滝集落でも同じであり、震災前から過疎高齢問題を抱えてきた。2011年に震災があり、2年間でほぼ復旧ができている。今後の課題を考えると過疎問題が止まらない。小滝集落の世帯構成から考えてみると、十年先の小滝では50歳以下の人口は9人しかいないことになる。震災があったとしても、復旧することができるが、今までの過疎の流れを変えるのはなかなか厳しい課題である。震災をきっかけにこれまでの過疎の流れを変えることが厳しいが緩和させる方向性が模索されている。

参考文献

- ・山口美里、福留邦洋、岡崎篤行 「山間地における震災被災住宅の修復過程と専門家の役割-新潟県中越地震における旧山古志村虫亀集落を事例として」 日本建築学会技術報告集 Vol. 14, No. 28, 573-576, 2008
- ・澤田雅浩 「新潟県中越地震における集落再建支援に関する研究」 東濃地震科学研究所報告 (24), No 69-72, 2009-03
- ・「新潟県中越地震の災害特性と復興課題」中林一樹・澤田雅浩・市古太郎 地域安全学会梗概集 (16), 37-40
- ・栄村HP : <http://www.vill.sakae.nagano.jp/>
- ・栄村役場 「栄村震災復興計画案」 2012年
- ・長野県 「栄村の復旧・復興に向けての復興支援方針」(平成24年02月23日)
- ・長野県栄村「栄村過疎地域自立促進計画-平成22~27年度一人ひとりが輝く元気な村」栄村、2010年、P7。
- ・「栄村震災復興議事録」2013年、P64
- ・総務省統計局HP : <http://www.stat.go.jp/index.htm>
- ・栄村住宅地図
- ・農林水産省HP : <http://www.maff.go.jp/index.html> (統計データ)
- ・栄村復興への歩みHP : <http://sakaemura-net.jugem.jp/>
- ・「栄村震災復興議事録」2013年
- ・長野県HP : <http://www.pref.nagano.lg.jp/>